

日刊 勤労千葉

81.2.23

No.666

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄三)二九三五(六)公衆(三三)三三二七〇七

国鉄当局の暴挙を許すな!

助役機関士線見訓練 阻止 才3日目(2/21)成田の闘い

公安機関士、乗務中の機関士を 運転室から暴力的に排除!

成田支部における助役機関士線見訓練阻止第三日目(二十一日)の闘いは、われわれの連日の闘いによってますます追いつめられた国鉄当局をして、公安機関士が機関車の運転台に乱入し、ついに乗務中の機関士を暴力的に運転室から排除するというかつてない暴挙にうって出ざるを得ないところまで追い込んだのである。

わが勤労千葉の三月ストライキに恐怖し、スト破り要員・助役機関士や公安機関士を導入し、なにがなんでもストライキ闘争を破壊し、弾圧せんとする国鉄当局・権力に対し、新たな怒りを込めて助役機関士線見訓練阻止の闘いを断固貫徹しよう。

「業務阻害者」は国鉄当局

七時前、各支部からの動員者が運転区乗務員詰所に続々と結集。

簡単な意志統一ののち、七時三〇分、成田駅三番ホームの機関車の真横にスクラムを組んで整列。機関士は、成田支部の大須賀執行委員だ。発車まで約三〇分の時間がある。

われわれの隊列の前方約三〇メートルのところに白腕章局課員約五〇名に囲まれた助役機関士が接近。その後方には、乱闘服の公安機関士約四〇名がいる。彼らは、除々にわれわれに接近し、成田駅長がマイクでオームのように「業務に支障があるのでただちに退去しなさい。」とくりかえす。わが隊列から矢つぎ早やに「スト破り助役機関士はかえれ」「機関士は運転室に乗ってるぞ」「業務には支障してないぞ」「公安はかえれ」などの声がとぶ。そのうちしびれを切らした当局が、われわれの隊列に突込んでくる。しかしわれわれは固いスクラムと怒りに燃えた気迫によってたちまち当局をはねかえす。

電車課長がマイクで「八時までには退去しないと、公安職員によって排除する」と力なく「警告」。

八時すぎ、白腕章と入れ替わって、前面に出てきた公安機関隊がわれわれの隊列にむかって突込んできた。

われわれの固いスクラムは、公安機関隊をもつてしてもなかなか崩れない。

われわれは、約一〇メートル後退したところで隊列を整え、公安の暴力と助役機関士に対し怒りのシュプレヒコールをたたきつける。

機関車では大須賀運転士が助役機関士をあくまで添乗させようとすると当局と対決。

成田駅長は、八時七分の発車時刻がとっくに過ぎていくにもかかわらず、全く列車を出発させようとしない。大須賀運転士は、断固として助役機関士の添乗を拒否し再三にわたって出発合図をう

↓(2月21日、9時、成田3番線ホームの機関車運転室内)



「俺がこの列車を運転するんだ! 助役機関士、公安、局白腕は直ちに運転席から退去せよ。出発合図を早く出せ!」とハンズを掲げて執拗する機関士を、公安が暴力的にひきずり降した!

ながす気笛をならす。われわれは、「大須賀運転士ガンバレ」「公安は帰れ」「スト破り助役機関士はすぐ帰れ」のシュプレヒコールをくりかえす。所定の発車時刻からすでに約一時間が経過した九時すぎ、当局は、公安五名を運転室に突入させ、運転席を離れることを拒否する大須賀運転士を暴力的に排除したのである。

二本目の日暮支部長の場合もほぼ同様の経過であくまでも助役機関士の線見訓練を拒否することに対し、当局は運転室から強制排除したのである。

当局の暴挙を許さず、助役機関士線見阻止・三月ストライキを断固貫徹しよう

われわれのこの間の連続した実力闘争は、ついに、国鉄当局をして「乗務員の運転室からの強制排除IIロックアウト」という「超法規的」な暴挙をもってしか助役機関士線見訓練を行なうことが出来ないところに追い込んだのである。

全組合員のみなさん。

われわれをふるいたたせ、勇気づけたこの二十一日の成田支部における闘いを全組合員一人一人のものとして、かならずや三月ストライキを圧倒的に貫徹しようではないか。

三月ジェット闘争は、正義の闘いである。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ!